

日本頭頸部癌学会

理事長 丹生 健一



日本頭頸部癌学会は
頭頸部癌治療の発展のために
幅広い領域の医師や専門家が集まる
学際的な学術団体です



理事長
丹生 健一



日本頭頸部癌学会は1961年に発足した頭頸部腫瘍研究会を前身とし、1977年に日本頭頸部腫瘍学会として発足しました。

2004年に日本頭頸部癌学会に改名し、2017年より一般社団法人となっています。現在、会員数は3,000名を超え、前身の研究会から数えますと61年目を迎えます。

現在の頭頸部がん診療では、耳鼻咽喉科、頭頸部外科、歯科口腔外科、形成外科などの外科系診療科とともに、放射線科や腫瘍内科の果たす役割が飛躍的に高まり、その他の外科系・内科系診療科や病理診断科との連携も必須となりました。

さらに、さまざまな医療職種による支持療法も質の高い医療を担保するために欠かすことができません。幅広い分野の専門医と医療職種で構成される本学会の学際的な特徴を生かし、わが国の頭頸部がん診療に貢献していきたいと考えています。

この10年間、経口的咽喉頭手術や手術支援ロボットなどを用いた低侵襲な手術技術、強度変調放射線治療や粒子線治療、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤など、頭頸部がんに対する新たな治療法が次々と登場しました。さらに、最近、ホウ素中性子補足療法やがん光免疫療法が保険適用となるなど、

頭頸部がんに対して実に多彩な治療法を選択できるようになっています。一方、世界に類を見ない高齢化社会を迎えたわが国では、頭頸部がん罹患した患者さんも高齢化し、臓器機能の低下や併存疾患、重複がん、認知障害を伴う方が増えてきました。さまざまな制約を抱えた目の前の患者さんに、多彩な選択肢の中から最適な治療を提供できるよう、学術集会や教育セミナーを通じて各治療法の至適使用の普及に努めるとともに、頭頸部がん診療ガイドラインをタイムリーに改訂していくことが必要です。本学会が運営する頭頸部悪性腫瘍全国登録の貴重なデータから、ガイドラインの根拠となるエビデンスを創出し、世界に発信していくことも本学会が担う重要な使命です。アジア頭頸部癌学会、国際頭頸部癌学会連合、各国の頭頸部癌学会との交流を積極的に進め、日本のプレゼンスを高めていきたいと考えています。

そして、何より、これからの頭頸部がん診療を担う次世代を育成していくことが本学会の最も重要な使命であると考えています。

命と機能を守る外科—耳鼻咽喉科頭頸部外科—の醍醐味を存分に味わえる学会です。ぜひ、皆様のご入会をお待ちしています。